

生文研メール

6号

平成18年11月30日

Ver. 1.0.1

生活文化研究所

〒700-8516

岡山市伊福町2-16-9

ハートランド清心女子大学

e-mail

ricch@post.ndsu.ac.jp

目次

日本人と海藻のかかわり (6)	今田節子	1
「こころぶと」の歴史と利用	新田義之	2
西鶴版『徒然草』 西鶴研究こぼれ話6	広嶋 進	4
不思議な出会い (その六) ハワイ大学(UH) 松井	横山 學	5

日本人と海藻のかかわり (6)

「こころぶと」の歴史と利用 今田節子

もう「こころぶと」が何であるかを知る者は希である。古くはトコロテンの材料であるテングサやトコロテンのことを「こころぶと」「ぶと」と呼んでいた。

(1) 「こころぶと」の歴史

平安時代の『倭名類聚抄』には「凝海藻 コルモハ 俗に心太」とあり、これはトコロテンの原料であるテングサのことである。煮溶かしたもの

が凝固する性質から「凝る海藻」の文字が当てられたのである。そして同時代の『延喜式』によると、テングサは調として各地から貢納され、齋会(さいえ)神仏をまつる儀式)の僧侶や導師の供養料として使われ、都の東西の市ではテングサが販売されていたことが記載されている。

一方、トコロテンを指した「こころぶと」については、室町時代の職業を紹介した『七十一番歌合』に、絵入りで「心太売り」が紹介されている(図1)。現在と変わらぬトコロテン突きの道具が使われているのには驚いてしまう。そして、同時代の『庭訓往来』ではトコロテンは西山の名物となっており、「西山は山にて海なし」とあるように、産地からテングサを求めてトコロテンを作り、名物とするといった説明がある。中世の頃からテングサが広く流通し、採取地以外でもトコロテンが食べられていた様子が想像される。さらに江戸時代の風俗を書き記した『守貞慢稿』によると、心太はトコロテンのことで夏の風物詩となっており、京阪では砂糖を、江戸では白糖や醤油をかけて食べるのが普通だったようである。

トコロテンの作り方や食べ方については、江戸時代に詳しく述べられるようになり、一般的には煮溶かしろ過した液を流し固め、生姜酢、醬汁、酢、砂糖、豆粉などに和えて食べられていた。また、「よく煮て数回沸騰させ、すりこぎですり回し糊のようになると山椒や生姜粉末をいれ盆に入れ冷やす」といった味付けされたトコロテン、醬糟、梅しそ汁に漬けたものなど、現在よりも多彩な食べ方がなされていた様子が窺える。



図1: 心太 (トコロテン) 売り (室町時代)
〔『七十一番職人歌合』⁴⁾より〕

(2) 寒天の発明

トコロテンを凍結乾燥したものが寒天である。寒天の発明は明暦年間(一六五五〜一六五八)とも万治年間(一六五八〜一六六一)ともいわれているが定かではない。山城の国の旅館で出されたトコロテンの残りを戸外に放っておいたところ、夜の

寒さで凍り、翌日には天日で乾燥されて寒天状のものになった。これが寒天発明のきっかけということになっている。江戸時代の『和漢三才図会』には、「冬の厳寒の際にテングサを炊き露天に出しておく、凝凍して寒天になり、蘇方(すおう)の木煎じ汁で染めたものを色寒天という」とある。寒天製造が大きく発展した様子がかがえる。日本料理の発達に伴って、江戸時代中後期を通して寒天の需要が拡大され、寒天産業が大きく発展していったものと思われる。

(3) テングサの食習慣

このように古くからテングサとその製品であるトコロテンが売られ、寒天の発明に繋がっていたことは、その後のテングサの食習慣に大きく影響を及ぼし、江戸時代以前にみられた食習慣が日本全国に広まっていった。

伝統的食生活のなかでは、漁村や近隣の農家では夏になるとよくテングサを炊いてトコロテンを作り、間食や副食とした。中国山地では昭和三〇年代まで、夏になるとトコロテン売りが来たという話を聞き驚いたことがある。また、トコロテンに砂糖を加えたり、食紅と砂糖を加えてようかん状にした寒天寄せは正月の重詰め料理や行事食の口取りに使われる祝いのごちそうであった。そして、盆にはトコロテンを「仏様の鏡」と呼び、精進料理として仏の供物や接待料理としても使われてきた。

テングサの古名「凝海藻 コルモハ」が示すように、テングサに含まれる多糖類は凝固性が高く、室温でも凝固する性質をもつ。家庭に氷や冷蔵庫が普及する以前からトコロテンや寒天寄せが作られたのは、この性質を先人が発見したからである。そして、あの透明感のあるトコロテンを作るためには白く晒したテングサが使われた。海藻を真水で洗い太陽光線に当てるだけの自然の力を利用した漂白方法は、どのようなきっかけから生まれたのであろうか。

素朴な料理であるトコロテンや寒天寄せには、先人の経験的知恵が込められており、調理科学的視点からみても興味深い料理である。

【主な参考文献】

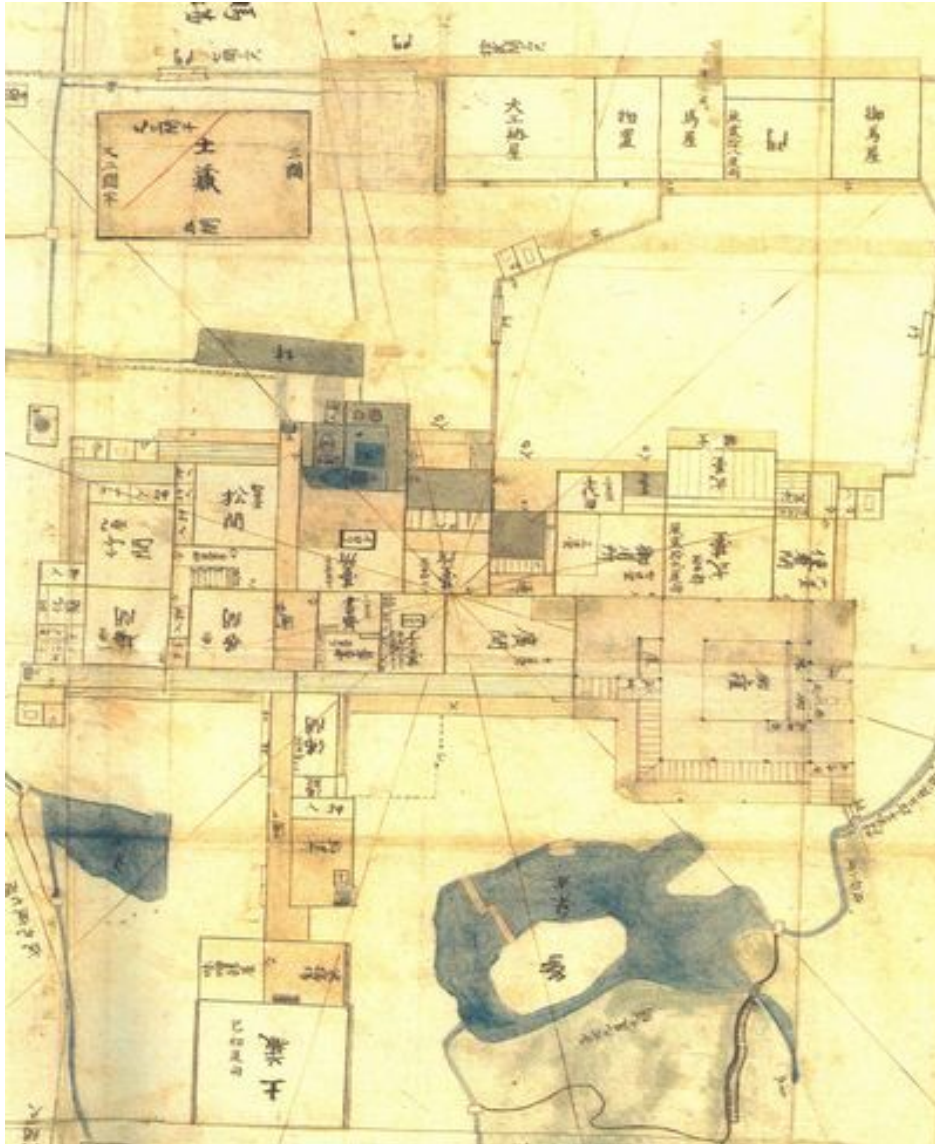
- (1) 『古事類苑』植物部、吉川弘文館、一九八五。
- (2) 『諸本集成倭名類聚抄』本文編、京都大学文学部国語学国文学研究室編、臨川書店、一九七七。
- (3) 「延喜式」、正宗敦夫編『復刻日本古典全集』現代思想社、一九七六、所収。(4) 「七十一番職人歌合」、川俣馨編『新校群書類従』第二十二巻内外書籍、一九三二、所収。(5) 人見必大著・島田勇雄訳注『本朝食鑑』平凡社、一九七六。
- (6) 寺島良安著・島田勇雄・竹島淳夫・樋口元巳訳注『和漢三才図会』平凡社、一九九一。(7) 宮本章『海藻』、法政大学出版出版局、一九八〇。
- (8) 今田節子『海藻の食文化』成山堂書店、二〇〇三。

体験的生活文化史 昭和編 その六

新田義之

昭和三年五月一日に二十一歳になったばかりの姉が死去した。当時は奔馬性結核と呼ばれていた急性の結核に感染し、床についてから何ヶ月も経たない内に、父と母の必死の看病の甲斐も無く、若い命を散らせたのである。その後一年あまり、父母が殆ど放心状態であったことを思い出す。統計をみると私の生地石川県は、大正一年から昭和二年までの四半世紀にわたって、結核死亡率が日本全国で常に一位であった。罷患者は、地方から金沢市に出稼ぎに来た若い職業婦人が多かったのは言うまでも無いが、戦中戦後の時代には、過労と栄養不足のために患者の年齢層の幅は、幼児から中年にまで広がっていたように思う。私の小学校の友達で肋膜炎や脊椎カリエスで世を去った者も数人おり、私自身も終戦の年に重い肋膜炎を患って一年間休学したことは、この連載の第二回目に書いた通りである。母の弟や私のもう一人のずっと年上の姉など、若くして結核で亡くなった人は多く、芸術家や作家・詩人などには、この病気に罹っていることを天才たる者の条件だとして、誇りとする風潮さえあった。詳しくは福田真人著『結核の文化史』(名大出版会一九九五)などを参照されたい。

幸いに私は肋膜炎の予後を無事に乗り切り、いづらか元気になって中学時代を過ごし、前回に述



図版1

べたように新制の津幡高等学校に進んだ。当時はまだ一般の農家では、子どもを高等学校に進学させるのは贅沢だと思っ傾向が強かったので、五十人ほどいた同級生のうち、進学したのは一割にも

満たなかった。一番仲の良かったS君は、勉強好きで家も比較的豊かだったが、どうしても進学を許してもらえなかった一人である。思い余った彼は突然家を出して、私の家に転がりこんだ。

そして何度迎えが来ても、進学を許してくれるまで帰らないといって、頑強に反抗した。しかし父親がやって来て、私たちの取成しや説得にも耳を貸さず強引に連れて帰り、そのまま家に監禁してしまった。人の噂では、父親は息子に手酷い折檻さえ加えたという。

私がS君と再会したのは、それから三十年余り過ぎた頃の、中学同級生の集まりであった。彼は金沢の某土木会社の企画部長になっており、クラス会の後で私を大きな車に乗せてホテルまで送ってくれた。そしてその車中で、なんと次のように言ったのである。「おい、お前今度の町長選挙に出ないか。半年分の選挙運動資金と、もしも落選したら一年分の生活費を保障してやるが。」

さてここで、話しを私の高校時代に戻そう。高校二年の秋（昭和二十六年、一九五二）、父は文化元年（一八〇四）ごろに建造された大きな家屋敷を、これ以上無理を重ねて維持するのに耐え切れず、長屋門と呼ばれる建造物一棟と家族の住む一角だけを残して、母屋の大部分を解体し競売にかけた。図版1は嘉永二年（一八四九）に作成された「家屋敷百分一之図」の一部分を転写したものである。藩主前田侯を迎える時だけに使われた、「御上檀」と呼ばれる上段の間を含む部分は勿論、仏間も客間も茶室もすべてこの時に失われ、今に残っているのは「松間（まつのみま）」「竹間（たけのみま）」「梅間（うめのま）」「居間（おいま）」と



写真2

その部分の上にある二階の二間、古二階と呼ばれる広い納戸、および屋根裏部屋の部分だけである。写真2は取り壊された母屋の正面部分、写真3は現存する長屋門の正面部分で、2・3ともに大正末年頃に撮影されたものであろう。私が高校二年まで住んだ家の状況はこの二枚の写真通りであった。

本屋の正面に長屋門を置く配置は加賀藩に独特の十村（とむら）屋敷様式だと、幼い頃に祖母から聞かされていたが、それが当たっているかどうかは江戸時代建築史にうとい私には分からない。

しかし広い式台を備えた表玄関の間に、殿様の為の上檀の間を持つ部分が直接に繋がる母屋の様式は、決して加賀藩の十村屋敷に独特のものとは言えず、もっと広い地域の庄屋の屋敷に共通する様式らしい。このことに私が

気づいたのは、福山の近くの神邊かみなべという町を訪れた時のことであつた。神邊は周知の如く菅茶山の黄葉夕陽村舎のある所で、かつて頼山陽



写真3

も学んだこの学塾を見学するため、私は昭和五十一年十一月のある日、福山を経て神邊に行き、菅好雄氏のお宅を訪問した。菅氏は茶山のご一族で、黄葉夕陽村舎の現在の持ち主である。菅氏のご案内で、私はこの建物とそこに收藏された品々を見学したが、その折に神邊の宿駅本陣をも見学することが出来た。

神邊は江戸時代山陽道の宿駅で、川北村と川南村の二村からなり、川北村には西本陣と東本陣の二つの本陣があり、ともに菅波家がこれを経営していた。菅波家は茶山の父の家で、菅氏のご先祖の本家でもある。西本陣は菅波本家の尾道屋、東本陣は分家の本庄屋が担当し、前者は殆ど黒田侯の専用宿舎であり、通常は後者すなわち東本陣が宿駅として使われていたという。しかし本庄屋の

東本陣屋敷はもう跡を留めておらず、今も当時と殆ど同じ姿で保存されているのは、本家尾道屋の本陣だけである。この建物は、重要文化財に指定されている。

そして驚いたことに、この本陣の本屋部分が私の生家の構造にとてもよく似ていたのである。

しかしこの尾道屋本陣の門構えがどうなっていたかは、残念ながら記憶が定かではない。今となつてはもう、神邊まで出かけて、尾道屋本陣を再訪するのは難しい。もしこの菅茶山の故地を訪れる方があれば、江戸時代の宿駅の風情を色濃く残す宿場本陣の建築構造を詳しく写真に収めて、生文研メールの発行所にお寄せくださることを、切にお願いしたいと思う。

西鶴版『徒然草』

西鶴研究こぼれ話 6

広嶋 進

一七世紀には、空前の『徒然草』の出版ブームがあつた。数々の『徒然草』版本や各種の注釈書が、次々に印刷・刊行されるという現象が起こつた。たとえば、注釈書として、林羅山『野槌』（一六二一年頃成立）、松永貞徳『なぐさみ草』（一六五二年頃成立）、北村季吟『徒然草文段抄』（一六六七年刊）などが執筆され、いずれも広く流布した。そして、浅香山井の『徒然草諸抄大成』（一六八八年刊）が出た。この書は、一三種の先行注釈書を集成した、全二〇巻の大書である。そして江戸時代を通じて注釈書版本三〇余、テキストは古活字本一五種、整版本三五種が刊行されるに至つた。

これら数多くの注釈書は、儒教的立場、仏教的

立場、国学的立場から書かれたが、なぜ、これほどまでに『徒然草』が近世前期の知識人や庶民に歓迎されたのであろうか。その理由としては、①『徒然草』が新時代の教訓書として「日本の論語」として受容されたこと②兼好が遁世者でありながら、世俗の出来事に関心を持つ「粹法師」であり、彼の現世に対する観察や感想が近世人に支持されたことなどが考えられる。

西鶴の第五遺稿集に『西鶴俗つれづれ』（一六九五年刊）という書がある。その書名から、この書は西鶴版の『徒然草』であると一般には考えられている。たしかに、『徒然草』には飲酒の害に関する章段（第一七五段、第八七段）があり、『西鶴俗つれづれ』中の七章は酒害を巡る話から成り立っている。

しかしながら、『徒然草』は酒のこのみをお話題とする書ではないし、また『西鶴俗つれづれ』の他の一章は『徒然草』と関連を持ってはいない。そもそも、『西鶴俗つれづれ』という書名自体が西鶴本人の命名によるものではなく、彼の死後、書肆が勝手に命名したものである。

私は、西鶴第二遺稿集『西鶴織留』（一六九四年刊）の巻三〇六こそが、西鶴が自ら『西鶴版・徒然草』として執筆した原稿だったのでないかと推定している。『西鶴織留』序文は次の通りである。

風は形なふして松に響き、花は色あつて物言

はず。まなこにさへぎることは心に浮かび（二三五段）、思ふ事言はねば腹ふくるゝ（一九段）と言ふは昔。やつがれが小さき腹してつたなき口をあけて、世間のよしなしごとを筆につづけて（序段）、これを『世の人心』と名づけ、難波のくれは鳥織り留むる物（兼好の筵織り伝説）ならし。

右の序文が『世の人心』という書物のために書かれていることは明らかである。また（一）に注記したように、『徒然草』のいくつかの章段や兼好伝説を踏まえて行文されている。

そして近世の読者が「世の人の心」「世間の人の心」を書いた作品として、第一に想起した作品は『徒然草』だったのではないかと思われる。たとえば、『徒然草』注釈書の序には次のようになっている。

人の心を種として万の言種となれるといふ。
（略）かやの姫を野槌とも言へば、草の種をつれづれしるして『野槌』と名づく。（『野槌』自序）

それ人の天然の心は明なる鏡のごとし。（略）（仏教・儒教・道教は）みな心の一字を説くには過ぎ。（略）兼好はその跡を踏みて（略）人をして名利の諸欲をはなれ、身心を安楽ならしめん事を教へたり。（南部草寿『徒然草諺解』序、一六六九年刊）
このように「人の心」「人の天然の心」という

語が、注釈書の序に見られる。さらに『野槌』は広く流布した影響力の大きかった注釈書であるが、自らを規定して「草の種（＝人の心）をつれづれしるし」た書としている。

『世の人心』とは『西鶴織留』巻三〇六に該当すると私は判断している（その推定の根拠については、拙著『西鶴探究』を参照いただければ幸いである）。『世の人心』は、見過ぎや家職とそれに伴う「人の心」を綴った随筆であり、移ろい易い人の心を多く取り上げている。本作以降、西鶴は説話的な作品を執筆しなくなり、晩年の傑作『万の文反古』『世間胸算用』『西鶴置土産』へと作風を変えていく。西鶴版『徒然草』＝『世の人心』は、もっと広く読まれてよい作品であり、また正当な評価を受けるべき作品であるように思う。

不思議な出会い（その六）

ハワイ大学 D.松井

横山 學

三十年近く通ったハワイ大学のハミルトン図書館に居ると、いつも錯覚に陥ります。その建物五階の奥まった一室に、あるいはリファレンス机の向こうに、見慣れた姿が座っているような気がするのは、ぱりっとしたアロハシャツ、整えられた頭髪と口髭。突然やって来ても驚いた様子もなく、「おお、よお来たのお」と、聞きなれたアクセントで迎えてくれたのは、松井正人さんでした。

松井さんは坂巻駿三のかつての院生で、図書館に勤めながら、薩摩藩主高津重豪の研究で歴史学のPh.D.を取りました。初めて会ったのは、キャンパス内の夏期大学の入室で、琉球史料の調査に出かけた時でした。その時は未だ、フランク・ホーレーも坂巻駿三も知りませんでした。再び訪れたのは、宝玲叢刊（本邦書籍）の編集会議の時でした。フランク・ホーレーの集めた琉球関係の書物を資料集として刊行するための打ち合わせでした。この企画で、『琉球教育』『琉球所屬問題関係資料』『神戸貿易新聞』『江戸期琉球物資料集覧』が形となりました。その後、琉球史料（宝玲文庫本）の調査を進めるうちに、フランク・ホーレー、坂巻駿三、坂巻家の人びと、坂西志保へと関心が繋がってゆきました。

松井さんからは色々な場所で様々なことを教わりました。生い立ちから戦後間もない同志社の学生時代。ガリオア基金で大学図書館員としてアメリカに留学し、そのまま居ついてハワイに移って来たこと。失敗談やアメリカで生活する上での忠告など。とくに興味深かったのは、CJK（中国語・日本語・韓国語）言語の文献を取り扱う東洋文庫のライブラリアンのことでした。外国でこれらの文献を整えて管理し、学生や研究者などの外国人の手助けをする仕事です。母語の能力はもとより英語に堪能で、そして文献情報に精通していなければなりません。日本文献のライブラリアン

は、多くの場合、その部署に一人しか配置されていません。選書からレファレンスまでをこなし、日本からの学生や研究者への手助けも任せられます。短期間の滞在で効率よく資料を集めたいという我儘にも、手際よく応えてくれます。シラキユース、シカゴ、コロンビア、ニューヨーク、エール、ピッツバーク、カリフォルニア、シアトルの大学図書館の仲間のことに触れながら、仕事の難しさや多くの留学生や研究者との出会いについて、懐かしそうに話してくれました。現在研究中の坂西志保も、戦前に米国議会図書館の日本文庫ライブラリアンとして活躍していました。坂西の果たした役割と仕事の内容を考えるうえで、それらの話は有難いことでした。また、松井さんの語る坂巻駿三の姿は、フランク・ホーレーの研究を進めてゆくなかで興味深いものでした。ホーレーの死後、売り立てによって散逸しそうになった宝玲文庫のうち、琉球関係の書物（約二千冊）を買い取り、学内外に協力を呼びかけ、ハワイ大学にもたらしたのは坂巻駿三でした。学内業政にも手腕を振るった坂巻を、公私ともに近くで見ていた松井さんの話で、わたくしの坂巻像は深まりました。

松井さんが体調を崩して静養を始めたとき、ワイキキを一望できるペントハウスの自宅を訪れました。その日は偶然にも、本土から来た戦艦ミズーリーがワイキキ沖を曳航されて真珠湾へ向かう日でした。戦艦アリゾナや潜水艦ボーフィンとと

もに、太平洋戦争の証人として係留展示されるためでした。巨大な船体の詳細まで、ベットの位置からものはつきりと見えました。戦後の歴史のひと区切りをそれぞれに感じ、日本の思い出など取り止めのない話を交わしました。それが最後の会話となることはお互いに知っていましたが、とても爽やかな「お別れ」のひと時であったと記憶しています。

わたくしの住まいの近くには、宝暦年間に創建された日蓮宗の法昌山大林寺があります。楠木の巨木は屋並の上に葉を茂らせ、散歩の時の目印です。大木の傍らには帝釈堂があり、その木陰に松井さんが眠っています。分骨された一部は、妻アデリーナによってハワイの墓地に納められました。「同郷の好」という言葉にわたくしは馴染めませんが、様々な因縁にひとは結ばれて生きていることを感じさせられています。

編集後記 講演紹介。横山學（所員）、特別講演「知られざる琉球使節」、輛の浦歴史民俗資料館、平成十八年十月二十二日。特別展「琉球使節展」（十月十二日～十一月二十六日）の一部として。

購入資料の紹介

『山陽ジャーナル』創刊号（二百十二号）（昭和三十四年七月十日）～二百十二号（五十三年八月二十五日）。岡山郷土雑誌、B5版。（Y）